

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

DOLGOR Delgermaa

論 文 題 目

モンゴルの社会主義時代における政治的粛清の記憶
—東北部ヘンティール県を中心に—

論文審査担当者

主 査

	名古屋大学	教授	内田綾子
委員	名古屋大学	准教授	サヴェリエフ・イゴリ
委員	名古屋大学	准教授	坂部晶子
委員	名古屋大学	教授	木下 徹

論文審査の結果の要旨

1. 本論文の構成と概要

本論文は、1920年代から80年代のモンゴル社会主義時代に行われた政治的粛清の背景と人々の記憶、そして現代のモンゴルにおける記念について、とくに東北部のヘンティー県に焦点をあてて考察している。

モンゴルでは1911年の辛亥革命を契機に民族解放運動が起こり、約200年にわたる清国の支配から解放された。そして1921年にソビエト赤軍の援助を得て独立を宣言した。1924年にはモンゴル人民共和国が成立し、社会主義体制に移行した。しかし、次第にソ連・コミンテルンによってモンゴル人民革命党の方針を見直す動きが始まり、思想的反対者は解任、ソ連へ追放されたほか、逮捕・処刑され始めた。また、独立後のモンゴルでは政治家の権力争いや不信、思想対立なども激化し、1930年代には政治・経済面で実質的にソ連の衛星国となった。当時、モンゴル指導者のチョイバルサンはスターリンの指示を受けて、大勢の反対派を「日本のスパイ」として「大粛清」し、自らの独裁体制を築いたのである。その後、1952年にチョイバルサン、その翌年にスターリンが死去すると、ソ連ではフルシチョフ、モンゴルではツェデンバルが政権を掌握した。ツェデンバル政権は1980年代半ばまで続き、この時期に「反ソ連」、「反党」、「ナショナリスト（民族主義者）」の名のもとに政治家や知識人たちが追放、禁固された。以上のように、モンゴルにおける政治的粛清は、チョイバルサン政権とツェデンバル政権という2つの時代に展開した。

従来、モンゴルの政治的粛清については、犠牲者を多く出した1937年から1939年にかけての「大粛清」が主に研究されてきた。しかし、本論文では、第二次世界大戦後から1980年代までの時期も対象にすることによって、戦前と戦後の社会主義時代に計36,000人余が犠牲となった政治的粛清の歴史を明らかにしている。また、東北部で国境に位置し、モンゴルの中でも二番目に多くの犠牲者を出したヘンティー県に注目している点の特徴である。さらに、本研究は政治的粛清をめぐる一般の人々の体験と回想をたどり、現代モンゴルにおける集合的記憶について検証している。

資料としては、現地調査でヘンティー県の住民に対して行ったインタビューやモンゴル語の史料・統計、またケンブリッジ大学モンゴル・内陸アジア研究センターによるオーラル・ヒストリーを主に分析している。そのうえで、なぜモンゴルで政治的粛清が行われ、とくにヘンティー県ではどのように記憶されてきたのか、また1990年代以降、民主化したモンゴルにおいて、どのように記念されてきたのかを考察している。

本論文は序論、第1章から第4章、そして結論より構成されている。

第1章では、まず政治的粛清の歴史に関するモンゴル国内外の先行研究について整理している。主に1990年代以降に始まったモンゴルの政治的粛清に関する研究では、一般の人々よりも政治家や革命家の粛清が多く取り上げられてきた。近年、国民や一般民衆の集合的記憶に注目した「記憶の歴史学」が研究されているが、このアプローチからモンゴル現代史をとらえた研究は少ない。また、ヘンティー県のような一定の地域に焦点をあてた研究はほとんどない。

次に1920年代から40年代にかけてモンゴルで政治的粛清が大規模に起こった要因を国内外の

論文審査の結果の要旨

背景とともに検討している。1921年に独立を宣言したモンゴルではソ連の介入が強まり、それに反発したモンゴルの革命家や政治家が粛清され始めた。さらに1932年に日本が満洲国を建国すると、勢力圏拡大をめぐるソ連と日本の対立によってモンゴルでは粛清が激化した。そして、当時、政治的粛清の対象となった各層のモンゴル人として、封建階級とされた旧王侯貴族や僧侶、革命指導者や政治家、「汎モンゴル」主義者、1920年代初頭にロシアからモンゴルに避難したブリヤード族についてまとめている。

第2章では、主に1930年代の大粛清について、モンゴル東北部のヘンティー県における粛清事件と被粛清者に焦点を当てて検討している。モンゴルでの現地調査とインタビュー、およびケンブリッジ大学モンゴル・内陸アジア研究センターによるオーラル・ヒストリーを分析し、ヘンティー県出身の被粛清者の子どもや遺族が今日、1930年代の粛清をどのように記憶しているのかを明らかにしている。

第3章では、先行研究が比較的少ない1950-1980年代の政治的粛清に注目し、その特徴を分析している。1956年のソ連共産党第20回大会を機にモンゴルでは指導部内の対立が高まったが、首相ツェデンバルは、自分やチョイバルサン元帥を批判する者を解任・追放した。この独裁体制を維持するための政治的粛清は1984年にツェデンバルが辞任するまで続いた。本章ではさらに、当時ヘンティー県で起こった政治的粛清と被粛清者に注目し、その特徴を検証している。

第4章は、現代のモンゴルにおいて粛清がどのように記念され、いかなる取り組みがなされてきたのかを1990年の民主化以降に実施された政治的粛清の犠牲者たちの名誉回復に関する法改正や補償制度を通じて検討している。さらに、ウランバートルとヘンティー県で行った現地調査に基づき、記念行事や記念碑、博物館などにおいて政治的粛清の記憶がどのように想起されてきたのかを集合的記憶の観点から明らかにしている。

結論では各章での検討を通じて、これまでのモンゴルにおける政治的粛清をめぐる記憶と記念の歴史的過程についてまとめ、今後、記憶を継承していくうえでの課題を提示している。戦前と戦後の政治的粛清について人々は社会主義時代に沈黙を強いられ、個人的記憶に記録・保持していた。しかし、1990年の民主化以降、次第にヘンティー県のローカルな記憶、そしてナショナルな公的記憶として語られるようになった。長期にわたり沈黙を強いられても、個人の記憶に記録・保持された政治的粛清は完全に忘却されることなく、時代と環境の変化によって集合的記憶として想起されてきたことがわかる。

2. 本論文の評価および問題点

本論文は、現地調査を通じて収集したモンゴル語の史料やインタビュー、参与観察記録、オーラル・ヒストリーを分析し、モンゴル社会主義期の政治的粛清をめぐる記憶のあり方を明らかにしている。とくに、これまであまり注目されてこなかった一般の犠牲者に焦点をあて、当事者のみでなく、その親族が長期にわたって受けたダメージを検討している点が評価できる。また、ヘンティー県という国境地域に注目することによって政治的粛清につながったモンゴル国内外の

論文審査の結果の要旨

歴史的・社会的背景をより詳細に分析している。さらに、社会主義期と民主化以降に政治的粛清がどのように解釈され、記念されてきたのかを記憶論の観点から検証している点に独自性が見られる。

一方、議論が十分に展開できなかった側面もある。

第一に、戦前・戦後を通じた社会主義時代全体の政治的粛清を検討することの意義をより明確にすべきであった。たとえば戦前・戦後で、被害者と加害者の立場はどのように変化したのか。1930年代に政治的粛清を行った加害者が1950年代には処分され、後に被害者として名誉回復されたような例はあったのか。また、政治的粛清がその後の国民相互の信頼や民主化後のモンゴル再建にもたらした影響についても考察できたはずである。

第二に、政治的粛清のいかなる側面が選別され、記念されてきたのか、どのような人物が名誉回復され、または回復されていないのか等を記念行事や記念碑、博物館での表象、文字資料ごとにより具体的に分析すべきであった。

第三に、モンゴル史の叙述の中で、戦前と戦後の政治的粛清がどのように語られ、1990年代以降にどのように変化し、書かれてきたのかがあまり明らかでない。とくに時期ごとの歴史教科書における粛清の語られ方、記述の内容をより詳細に考察すべきであったらう。

第四に、ポスト社会主義時代の変化については、他の国家や地域の研究もある。その中でモンゴルの特徴をより明確にし、位置づけることができたのではないか。

しかしながら、これらは本論文の価値や独創性をそこねるものでは決してなく、今後の研究課題としてより発展的に考察することが期待できるものである。

3. 評価結果の判定

上記4名の委員からなる審査委員会は、2020年5月22日、本審査委員会を開催し、博士課程（後期課程）のあるべき水準を満たしている、オリジナルな成果を含んでいることなどを確認・評価した。

よって本論文は博士（学術）の学位に値するものと判断する。